

## トルコにおける日本研究：歴史的俯瞰と現況

著者	ジラルデッリ青木 美由紀
雑誌名	世界の日本研究
巻	2019
ページ	4-31
発行年	2020-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00007441">http://doi.org/10.15055/00007441</a>

# トルコにおける日本研究

## ——歴史的俯瞰と現況——

ジラルデッリ青木美由紀

### はじめに

国際交流基金による2017年の調査では、現在トルコ共和国には全国に中等教育6、高等教育19、学校教育以外で12、全国で合計37の機関で日本語教育が行われている。このうち、日本語日本文学、日本語教育の専門課程が置かれているのは、アンカラ大学、チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学、内陸部カイセリのエルジエス大学で、カッパドキアのネヴシェヒル・ハジ・ベクターシユ大学は日本語日本文学科が新設され、2017年9月から26名の学生を受け入れている。

大学院のあるのはアンカラ大学（博士、修士課程）、エルジエス大学（修士課程）である。日本研究に限られないが、アジア学で修士号を授けるアジア学センターが近年ボアジチ大学に設立された。

選択科目として日本語の講座を開講しているのは、中東工科大学、ビルケント大学、ハジェテペ大学、トップ経済大学、アトゥルム大学、アンカラ社会科学大学、イスタンブル工科大学、イスタンブル商科大学、ボアジチ大学、ナムック・ケマル大学、バフチェシェヒル大学、イズミル経済大学、イズミル工科大学、ヤシャル大学、エーゲ大学、アクデニズ大学の16機関あるが、講座名があるだけで実態として開講されていないところもある。

現在、トルコにおける学術的な日本研究は、これらの高等教育機関を中心に展開されている。本稿では、歴史的背景を踏まえながら、広くトルコの一般に影響力のあった日本に関する知識の紹介、出版物、日本をテーマにした創作など、日本イメージの拡散も含め、現代に至る過程をまとめてみたい。

### 1. 中世からオスマン帝国時代の日本への関心と研究

トルコ共和国（1923年建国）の母体となったオスマン帝国（1299年建国）、さらに、それより以前のトルコ民族による日本への関心にまで遡れば、最初に言及されるのは、11世紀の有名なトルコ系の学者、カシュガーリー・マフムード

(Kaşgari Mahmud, 1008–1103, 4年頃)による地図である。トルコ系のカラハン朝出身のマフムードは、これもまたトルコ系のセルチュク朝支配下にあったバグダッドのカリフのために、同時代のトルコ系言語の最初の辞書を書いた。Dinan-i Lügat-i TürkまたはDîwān Lughāt al-Turkの名で知られる本書には、トルコ系諸民族の居住地の現存最古の地図が附されており、専門家によれば、この地図の中に日本が言及されている。本地図は現在イスタンブールのトルコ国立図書館に所蔵されている。

オスマン帝国になってからの日本への関心は、中国に付随したもの、あるいは中国の代替品としてはじまる。セリム一世時代(1465–1520)に書かれ、同スルタンの死亡により後継のスレイマン一世(1494–1566)に献呈されたアリ・エクベル(Ali Ekber)によるペルシャ語の著作『ヒターイの書』(*Hitayname*, 1515)が知られている。本書は、16世紀ムラト三世時代(1546–1595)にオスマン語に翻訳され、オスマン語の題は『Kânunnâme-i Çin-ü Hitâ (チン [中国] とヒターイ [契丹] の法律書)』、文献によっては『Tercüme-i Târih-i Nevâdir-i Çin ü Maçin (チン [中国] とマチンの珍しい歴史の翻訳)』として言及される。ヒターイ(Hitay、トルコ語でHitay)とは契丹を意味し、ヨーロッパ語で中世に中国北部を指したCathaiと同根の言葉だが、ペルシャ語でも同じ言葉で表現されていた。また、マチン(Maçin)は、中国に属する、東トウルキスタンの砂漠とタリム川南西部に居住するトルコ系の民族で、人類学的にはモンゴロイドとアーリア人の混血とされている。

ビルギン・アイドゥン(Bilgin Aydın)によれば、本書は、同時代の明朝の法制、宗教、生活習慣、共同体の生活、商業や農業生活、絵画芸術、祭礼、歴史的な事件、軍人と市民の生活、宿場町、中国のムスリム、ムスリム達の宮殿、都市での生活、役人達など広範にわたる情報を提供しており、さらに、中国と近隣諸国との関係について言及している<sup>1</sup>。すなわち、日本のことが付随的に登場する。

一方で、時を同じくして、オスマン帝国の政府中枢が置かれたトプカプ宮殿では、古陶を含め、中国磁器を珍重する文化が存在し、現在トプカプ宮殿に保存される陶磁器コレクションがこの時期に始まっている。オランダ東インド会社その他の経路を通じて中東にもたらされた中国陶磁はオスマン宮廷及び有力

---

1 Bilgin Aydın, XVI. Yüzyıl Osmanlı Seyahatnameleri Hakkında ir Değerlendirme, *Osmanlı Araştırmaları / The Journal of Ottoman Studies*, XL, 2012, pp. 435–51.

者に好んで購入され、実用に供するとともに、高価な宝物として保管された。宮廷コレクションには、直接購入の他、戦利品としての入手経路が知られている。コレクションには、同時代の明代のもののみでなく、中国青磁・染付では最高とされる宋元代の古いものも多く含まれることから、オスマン帝国には、他の宝物同様、中国陶磁に関しても、古物を収集する文化があったといえる。

日本はここでも、中国の代替的存在として登場する。17世紀、景德鎮窯の一時的機能停止によって東インド会社が仕入れ先を日本の有田にシフトしたのに伴い、トプカブ宮殿にも有田を主とする日本の陶磁器が入ることになる。トプカブ宮殿には、現在、約1万点の中国陶磁、700点ほどの日本陶磁が所蔵され、質・量ともに世界有数のコレクションとして知られている。

日本の陶磁器がオスマン宮廷に入ったとほぼ同時期、17世紀に、日本はオスマン帝国の知の見取り図の中で、初めて独立した位置を得た。オスマン帝国時代の最大の知性の一人とされるキヤーティプ・チェレビ (Kâtip Çelebi, 1609-1657) は、その代表作『Cihannuma (ジハヌマー：世界の展望台の意)』で、日本の支配体制、政治、経済、宗教、言語、商業、芸術、道德習慣、伝統について記述し、地図で示した。本書は、アブラハム・オルテリウス (Abraham Ortelius, 1527-1598) やメルカトル (Gerardus Mercator, 1512-1594)、ロレンツォ・ディ・カラブリアなど西洋の地理学の最新の成果と、Takvim al-Buldan, Avzah al-Masalik, Nuzhat al-Muštak, Nuzhat al-Kulubなどのイスラーム地理学の成果の両方を集大成したものとされ、オスマン帝国の地理学に画期的な転換をもたらしたとされる。手書き写本の写しが多数存在し、トプカブ宮殿博物館、パリ国立博物館、大英博物館をはじめとして各地に所蔵されている。写本は1732年、イブラーヒム・ミュテフェリカ (İbrahim Müteferrika) によって地図が加えられ、28 + 698 ページで出版された。日本は、キヤーティプ・チェレビの別の著作『Tuhfat al-Kibar fi Asfar al-Bihar』にも言及されている。手書き写本がイスタンブル大学、パリ国立図書館など各地に所蔵され、本書も1729年にイブラーヒム・ミュテフェリカによって出版された。キヤーティプ・チェレビの著作は、日本に特化した研究ではないが、最初の学術的言及という意味で重要であり、20世紀になってから、オルハン・シャーイク・ギョクヤイ (Orhan Şaik Gökyay) によって再版され (1973年、1980年)、普及という意味では最もよく知られた作品である。

18世紀になると、中国に関するペルシャ語著作のオスマン語訳が進められ

る。ティームール朝のパトロンのために書かれたホジャ・グヤーセッディン・ナッカーシュ (Hoca Giyaseddin Nakkas) による『Hitay Seyahatnamesi (ヒターイ [北中国] 旅行記)』(1422年)は、ペルシャ語による中国旅行記のうち最古のものとして知られる。本書は、1728年にクチュックチェレビザーデ・イスマーイール・アスム (Küçükçelebızade İsmail Asım) によってオスマン語に翻訳されている。

## 2. 19世紀以降のオスマン帝国の日本への関心

オスマン帝国の人々が、「日本」に本格的に関心を持ち始めるのは、幕末の開国前後のことである。オスマン帝国上層部及び知識人は主に同時代のヨーロッパの新聞報道や、フランスを主とするヨーロッパ諸国で出版された外交官の日記・旅行記などから、日本の鎖国、日本の銀価格と世界の相場の格差、徳川慶喜による外国使節の饗応、孝明天皇の突然の死、葬儀の様子、その後の明治天皇の即位などについて情報を得ている。また、19世紀末世界の主要都市各地で開催された万国博覧会はオスマン帝国にとって日本の情報を得る大きな機会となった。オスマン帝国は最初の1851年ロンドン万博から欠かさず参加していた。初期の万国博覧会では、ヨーロッパの外交官や商人を通じて日本品も少量展示されていたので、当然、知識は到達していた。将軍徳川慶喜の14歳の弟昭武が将軍名代として開会式に出席し、江戸幕府と別途薩摩藩、肥前藩が参加して物議を醸した1867年パリ万博は、オスマン帝国史の文脈では、スルタン・アブドゥルアジーズ (1861-1876) がオスマン帝国スルタンとして初めて征服以外の目的で外国へ旅行したことで知られる。この旅行には、アブドゥルアジーズの二人の弟で、のちにそれぞれスルタンとなる王子ムラトとアブドゥルハミットも同行しており、日本の文物を見ている。

明治天皇と使節を送りあったのちのスルタン・アブドゥルハミット二世は、少年期から日本への関心がことに高かったことが知られている。1872年、ウィーン万博に日本が参加することがヨーロッパの新聞で報じられると、王子アブドゥルハミットは、ウィーンとゆかりの深い自分付きの侍医マヴロコルヤーンに特に命じて、日本についての調査をさせたことが、侍医の日記から判明している<sup>2</sup>。

---

2 Ziya Şakir, *Abdülhamit ve Mikado*, İstanbul, 1943.

その後のアブドゥルハミット二世の日本への関心は知られるとおりである。1887年小松宮彰仁親王が日本の皇族として初めてイスタンブルを訪問、答礼として、アブドゥルハミット二世は軍艦エルトゥールル号を日本へ派遣した。これは、見方を変えれば大掛かりな日本調査隊であり、無事に生還すれば日本についての大きな調査結果となるはずだったが、知られるように、同船は1890年9月、帰路に和歌山県串本沖で遭難、約600人の乗組員中生存者は59名のみという大惨事となった。

### 3. オスマン帝国末期の地理学書に見る「日本」の記述

エルトゥールル号派遣（1890年）より以前に、日本について言及する著作は、地理学書の中に散見される。

筆者が追跡した限り、最も早い時期のものは、1869年出版の『Fenni Coğrafya (地理の科学)』<sup>3</sup>がある。著者のガーズイー・アフメット・ムフタル・パシヤ (Gazi Ahmet Muhtar Paşa, 1839-1918) は、歴史、宗教、天文学の分野に通じた知識人で、軍人としてのキャリアを積み、1912年に一時期大宰相も務めた。宇宙、政治、自然の三部に分けて地理を述べた本書は、地球上の五大陸、大陸上の国々、各国の自然、政治的地理、国内の行政区分、主要都市について述べられており、日本への言及がある。各国ごとに、その国の行政単位と都市の人口と面積を示すグラフ、陸海軍の装備を示すグラフが付されている。

翌1870年には、19世紀にオスマン帝国で出版された地理学書の中で最も重要なものの一つとされる『Hulāsa-i Coğrafya (地理学概要)』<sup>4</sup>が出ている。本書は、教育省によって中学校の教科書として出版され、12版を重ねた。著者のスレイマン・シェヴケット・パシヤ (Süleyman Şevket Paşa, 生没年不明、1892年に健在) は1860年にミュヘンディスハーネ (現イスタンブル工科大学の前身) を卒業し1892年の時点で第五軍隊少将だった軍人で、本書は1巻の中に3部が含まれる形で構成されている。第1部は地理学概要180ページとヨーロッパ、第2部はアジア、アフリカ、第3部がアメリカとオセアニアに割かれ、地理的特徴や歴史概要が説明されるが、記述内容や分量は平等でなく、ヨーロッパ諸国

3 İstanbul, 1286/1869, 2+228 sayfa, taş basma, 11 x 16 (8.5 x 13) cm.

4 第1巻: Mukaddeme ve Avrupa kısmı: İstanbul, Tophane-i Amire Matbaası, 1286/1870, 6Ş268 sayfa, 第2巻: Asya ve Afrika kıtaları kısmı: aynı matbaa, 1287/1870, 202 sayfa 第3巻: Amerika ve Okyanusya kısmı: aynı matbaa, 1288/1871, 92 sayfa, 11 x 16 (8.7 x 13) cm.

に重点が置かれている。この点から、オスマン帝国の知識人の西洋至上主義がこのころから始まっているとの評価がある<sup>5</sup>。

スルタン・アブドゥルハミット二世から大使として派遣されインド・アフガニスタン地方の旅行記の著作もあるシルヴァンル・アフメット・ハムディ (Şirvanlı Ahmed Hamdi) による 1875 年の地理書『Usûl-Coğrafya-yı Kebîr (大地理学書)』<sup>6</sup>には日本への言及がある。本書はフランスの地理学者ウージェーヌ・コルタンベール (Eugène Cortambert, 1805-1881) の著作の翻訳に著者による補強が入り、単なる翻訳を超えたものとされる。

1882 年以前、各種学校で地理学、地相学教師を務めたヒュセイン・ヒュスニー (生没年不明、1892 年ごろ健在) による『Coğrafya-yı Umumi (地理学総論)』が執筆されており、手写本の原本がイスタンブール大学に保存されている<sup>7</sup>。イスタンブールのウスキュダル生まれ、ボスニアのイダーディー (高等学校) 初代卒業生の一人でイスタンブール・ハルビエ陸軍士官学校卒のヒュスニーは、陸軍学校の最終学年カリキュラムに適するものとして本書を執筆した。本書は、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカ、オセアニアの順に詳述され、日本への言及がある。士官学校の教科書として作成されたことから、政治・経済の地理への言及が多く、社会や風俗習慣についての記述は少ない。地理学者によれば、形式から見て、何か元になる本の翻訳書である点は明らかだが、原典が何かは明らかになっていない。本書はのちに手を加えて 1882 年に『İcmâl-i Coğrafya (地理学要約)』として 2 巻本が執筆され、1883 年に出版された<sup>8</sup>。手写本はイスタンブール大学に所蔵されている<sup>9</sup>。

中等教育の教科書として編纂・出版され、日本への言及が確認されるものと

---

5 Ekmeleddi İhsanoğlu, *ibid.*, p. 307.

6 別名 *Nuzhat al-Buldân li Tanşit al-Azhân*, 第 1 版 : İstanbul Şeyh Yahya Efendi Matbaası, 1292/1875. 6\*664 sayfa, 16 x 24 (11 x 20.5) cm.

7 İstanbul Üniversitesi, TY, nr. 4191: rika ile 132 yaprak, 17,2 x 25,9 cm (11 x 19) cm, 23 satır, müellif tarafından II. Abdülhamid devrinde istinsah edilmiştir.

8 İstanbul, Aramya Matbaası 1300/1883, 276 sayfa, 15 x 23 (11 x 18.5) cm.

9 İstanbul Üniversitesi, TY, nr. 6617: birinci cilt, 99 yaprak, rika ile, 15,3 x 21,3 (9,8 x 15,5) cm, 14str, Müellif tarafından H.1300 yılında İstanbul'da istinsah edilmiştir. İstanbul Üniversitesi, TY, nr. 6618, ikinci cilt, İcmâl-i Coğrafya-yı Umumi Atlası, 35 adet yazısız haritadan meydana gelir. 46 yaprak, 20 x 27,2 cm. İstinsha müellif tarafından H. 1300 yılında.

して、1883年にエディルネのルシュティエ・メクテビ（中学校）教師ルファット・エフエンディ（Rıfat Efendi）による地理書『Kı'ât-ı Hamse Taksîmâtı（五大陸分類）』、『Taksîmât-ı Coğrafya-yı Husûsî（地理学詳論）』<sup>10</sup>、1890年出版のデルヴィシユ・パシャ・プレヴェゼリ（Dervîş Paşa Prevezeli）による『Coğrafya-yı Asğar（最小限の地理学）』<sup>11</sup>などがある。

1886年には政府高級官僚でカスタモヌ県知事なども務めたクドゥシー・ザーデ・メフメット・アーキル（Kudsî-Zâde Mehmed Âkil, 1870-1898 以前没）が高等学校に在学中フランス語から翻訳した『Muhtasar Coğrafya-yı Umumi（短編地理学総論）』<sup>12</sup>が出版されており、本書にも日本への言及がある。本書は、フランスの高校地理学教師ジャン・レオン・サニ（Jean Léon Sanis, 1801-1879）の著作の翻訳で、授業形式で記述されたものである。

陸軍士官学校の歴史教師で、歴史・地理の分野で少なくとも七つの著作が知られるアリ・テヴフィク（Ali Fevîk, 1911年に健在）が1888年に出版した『Yeni Coğrafya（新地理学）』<sup>13</sup>は、中等軍事学校の3年、4年生の課程に適するよう準備された世界地理で、日本への言及がある。3版を重ねている。

同年1888年にファズル・ネジブ・セラーニクリ（Fazl Necib Selanikli, 1863-1932）によって中学校の教科書として出版された『Coğrafya-yı Tabii ve Politiki（自然と政治の地理学）』<sup>14</sup>は図版・地図入りの世界地理学書で、日本への言及がある。フランスの地理学者コルタンベール・ヤルヴァスール（Pierre Émile Levasseur, 1828-1911）の著作が参考にされている。文中、オスマン帝国では5年に1冊くらいのペースで地理の教科書が出版されるが、当時の頻繁な国境の変化に対応できていないとの記述がある。巻末に、ヨーロッパの鉄道・馬車道

---

10 第1巻：İstanbul, Mihran Matbaası, 1300/1883, 14 x 19 (9 x 13.5) cm, 297 sayfa, 第2巻：İstanbul, Mihran Matbaası, 1298/1880, 12.5 x 19 (9 x 13.5) cm, 128 sayfa.

11 İstanbul, Mahmud Bey Matbaası 1307/1890, 37 sayfa, 12 x 18 (8.5 x 16) cm.

12 İstanbul, Karabet ve Kasbar Matbaası, 1303/1886, 144 sayfa, 12 x 18 (7.5 x 12.5) cm, 34 harita.

13 第1版：İstanbul, Karabet ve Kasbar Matbaası, 1305/1888, 14 x 20 (8.5 x 15) cm, 4+260 sayfa, 第2版：İstanbul, Karabet ve Kasbar Matbaası, 1307/1890, 13 x 19 (8.5 x 15.5) cm, 2+283 sayfa, 第3版：İstanbul, Karabet ve Kasbar Matbaası, 1328/1912, 12 x 18 (8.5 x 14) cm, 2+406 sayfa] resimli.

14 İstanbul, A. Maviyan Matbaası, 1305/1888, 14 x 20 (9 x 16) cm, 92 sayfa, resimli ve haritalı.

の距離、ヨーロッパ諸国の航海船、軍艦、商船の重量比較、ヨーロッパ主要国の面積、主要国（英国、ロシア、中国、アメリカ、フラジル、オスマン帝国、フランス、ドイツ）の人口と人口密度比較、五大陸の主要都市の人口比較などのグラフが付されている。

著作の正確な年は不明だが、メフメット・レシッド（Mehmed Reşid, 生没年不明、1898年に健在）による7巻本の地理学書『Kıtalar Coğrafyası（大陸別地理学）』<sup>15</sup>があり、ここにも日本への言及がある。1898年の時点でエディルネの中学校フランス語教師だった著者は、在職当時に本書を執筆し、書体から1890年代と同定される手写本が、イスタンブル大学に所蔵される。日本への言及があるのはアジアに割かれた第4巻で、ロシア、オスマン帝国のアジア地域、イラン、トゥルキスタン、アフガニスタン、バルチスタン、インド、中国帝国、ビルマ（現ミャンマー）、シャム（現タイ）、安南帝国（現ベトナム）とともに、日本の地理、政治、経済などに言及がある。

日本に言及のある地理学書の系統としては、1892年にハルビエ（陸軍士官学校）卒業の地図製作者アリ・シェレフ・パシャ（Ali Şeref Paşa, ?-1907）による『Coğrafya Umūmī Atlası』<sup>16</sup>がある。1862年にパリのオスマン人用学校メクテプ・イ・オスマーニー（Mekteb-i Osmani）に地図製作習得のために派遣され、1868年にフランスの地図製作を参考にした22点のカラー版『Yeni Atlas』を出版した。この時点では、フランス地理学協会会員であった。フランス地理学委員会製作の地図を翻訳した『Coğrafya Umūmī Atlası（地理学総論地図）』は、35点の地図からなり、23番目が日本と韓国の地図である。

同1892年、オスマンザーデ・ヒュセイン・ヴァッサフ（Osmanzade Hüseyin Vassaf, 1872-1929）は、世界を網羅した地理学書『Hulasa-i Coğrafya-ı Umumi』<sup>17</sup>でアジアの国々の一部として日本に言及している。著者は、オスマン帝国で活動した2000人余りのスーフィー（イスラームの修行者）の伝記を23年かけて記

---

15 İstanbul Üniversitesi, TY, nr. 4160-4166: rika ile 1. Cild: 28 yaprak, 2. Cild: 103 yaprak, 3. cild: 68 yaprak, 4. Cild: 42 yaprak, 5. Cild: 30 yaprak, 6. Cild: 36 yaprak, 7. Cild: 13 yaprak, 20,8 x 26,2 (14,5 x 23,3) cm, 26 str. İstinsahı müellif hattı ile H. XIV. Asrın başlarındadır.

16 第1版: İstanbul, Matbaa-i Amire, 1309/1892, 24 x 39 (21 x 33) cm, 2+39 sayfa, 第2版: İstanbul, Matbaa-i Amire, 1312/1894, 23 x 39 (21 x 33) cm, 2+39 sayfa.

17 İstanbul, Hakkak Serviçen Taş ve Hurufat Matbaası, 1309/1892, 12 x 18 (8,5 x 14) cm, 111 sayfa.

録した『Sefine-i Evliya-yı Ebrar (偉大な聖者たちの本)』の著者として有名な知識人である。

地理学について6点の著作が知られ、軍事学校教師であった可能性の高いセイイド・イスマイル・ハック(生没年不詳、1912年に健在)による総合的地理学書の手稿『Coğrafya (地理学)』<sup>18</sup>は、大部の著作の部分とみられているが、現存する残存部分に日本への言及がある。手稿はイスタンブル大学に所蔵されている。また、同著者による1893年出版の『Müntehab Coğrafya (地理学選)』<sup>19</sup>は、イスタンブル、ベシクタシュに所在のハミディー学校(Hamidi mektebi; アブデュルハミット二世創立の普通科軍事科併設の高等学校)の教科書として準備されたもので、日本への言及がある。英語・フランス語からの翻訳として知られている。

同年1893年、クリミア半島出身の教育者・新聞人ガスピラル・イスマーイル(Gaspıral İsmail, 1851-1914)は、ロシアのムスリムに基本的知識の普及を目的として『Atlaslı Cihannâme (地図入り世界地理)』<sup>20</sup>を出版した。著者はモスクワ軍事学校在学中、クレタ島のギリシャ人山賊と交戦のため出奔、オデッサで逮捕され、のちパリ、イスタンブルで語学教師・通訳・文筆家として活動、27歳で故郷へ戻り、バフチサライ市長となる。1883年に新聞『Tercüman Gazetesi』(のちの日刊新聞『Tercüman-ı Ahval-i Zaman』)を発刊。ロシア・ムスリムの啓蒙、歴史などについて図書多数。オスマンル語、ロシア語、フランス語の文献を参考にして地図、図版入りで刊行された本書は、地理学の定義、解説、効用、地図の書き方、地球の形、地図についての説明、方位、陸地と海の状態、土と水、人種、宗教、宗派、政府についての情報を提供するもので、世界の他の地域・国々と共に、日本への言及がある。

1896年にケヴァーキビザーデ・アブドゥルハーリク・ミドハト(Kevâkibî-Zâde Abdülhâlik Midhat, 1868-1911)によって出版された『Coğrafya Muallimi

---

18 \*İstanbul Üniversitesi, TY, nr. 2469: eserin ilk cildi, rika ile 191 yaprak, 15,7 x 23,5 (8,7 x 16) cm, 15str. Müellif müsveddesi olmalı. Yap. 11b-108b Avrupa, 11a-154b Asya, 155a-166a Afrika, 166-187a Amerika, 187b-191a Okyanusya.

19 第1版: İstanbul, Şirket-i Mürettibiye Matbaası, 1311/1893, 13 x 19 cm, 186 sayfa, 第2版: İstanbul, Şirket-i Mürettibiye Matbaası, 1316/1898, 12 x 18 (8,5 x 15) cm, 155+1 sayfa.

20 Bahçesaray, Tercüman Taş ve Hurufat Basmahanesi, 1893, 7 atlas, 36 x 23 (20,5 x 30,5) cm, 14 sayfa.

(地理学教本)』<sup>21</sup>は、第2巻アジアの部分が写真入り、地図入りで刊行された。写真入りという点で画期的である。著者は文化教育省に長く務めた後、イスタンブール法律学校 (İstanbul Hukuk Mektebi) の副校長となった人物である。本書は、アジアの地理的特徴、経済状況、産物、政治体制、地域区分、主要地域、民族、人種、文明、言語、宗教、宗派などを詳述し、政治概況、日本を含む各国詳細は、面積、人口、主要な特徴などのほか、歴史概観と最新の重要な時事事件などについても述べている。アジア地域の交通、陸路、鉄道、海路についても言及がある。アジアについてまとめた本書に、オスマン帝国領内のアジア地域への言及はなく、別の巻の計画があったと考えられている。

#### 4. 単独の日本研究書の登場——1890年代

エルトゥールル号事件が起こった1890年、オスマン帝国では単独に日本をテーマにした本が出ている。メクテビ・イーダーディ・ミュルキイエ・イ・シャーハーネ (高等学校) のフランス語卒業生でオスマン政府翻訳課勤務のメフメット・ゼキ (Mehmet Zeki, 1890年に活動) による著作『Japonya'nın Mâzisi, Hâli, İstikbâli (日本の過去、現在、未来)』<sup>22</sup>は、日本の歴史と地理についてのものである。日本の地理区分、島、自然の特徴、日本人の民族的特徴、生活様式、政治制度、主要都市、歴史などについて述べられている。日本がいかにか中世的な社会から当時の先進国として発展したかを考察し、西洋列強の抗いがたい力に対し、オスマン人の間で、当時賞賛の的であった日本が、どのようにして、どんな理由から発展したか、また、それに対しオスマン政府がなぜ遅れをとったかを説明しようと試みた作品である<sup>23</sup>。これは、日本のみをテーマにした最も早い時期の著作と言える。

翌1891年には、経歴不詳の翻訳者メフメット・サフヴェット (Mehmet

---

21 İstanbul, Alem Matbaası, Ahmed İhsan ve Şürekası 1314/1896, 11.3 x 16.8 (8.5 x 13.5) cm, 138 sayfa, şekilli.

22 İstanbul, Mahmud Bey Matbaası, 1308/1890, 13 x 19.5 (8.5 x 16) cm, 131 sayfa, 2 harita.

23 Ekmeleddin İhsanoğlu(ed.), Haz. Ekmeleddin İhsanoğlu, Ramazan Şeşen, M. Serdar Bekar, Gülcan Gündün, A. Hamdi Furat, *Osmanlı Coğrafya Literatürü Tarihi (History of Geographical Literature During the Ottoman Period)*, Cilt I ve II, İslam Tarih, Sanat ve Kültür Araştırma Merkezi (IRCIA), İstanbul, 2000, p. 288-89.

Safvet)による『Japonya Seyahatnamesi (日本旅行記)』<sup>24</sup>が出版されている。フランスの文学者ピエール・ロティ (Pierre Loti, 1850-1923) の日本旅行記の翻訳で、本書中では日本の歴史的旧跡、自然の美、伝統習慣などに触れられている。この時期での日本をテーマにした著作の翻訳書の存在は、オスマン帝国における日本研究が、西洋語の文献からも多くを吸収していたことを示している。また、学術的な研究だけでなく、文学などの一般に親しむことのできるレベルで関心が保たれていたことがわかる。

エルトゥールル事件の生存者帰還から約1年4ヶ月後の1892年4月、アブドゥルハミット二世は一人の調査員を日本へ派遣した。出発前はイエメンのサナア市長だったオスマン帝国官僚ムスタファ・ビン・ムスタファである。この人物は、アデンから出発、ムンバイ、カルカッタ、セイロン、シンガポール、ジョホール、サイゴン、香港、広州、中国内陸部、上海を經由後横浜へ到着し、東京、神戸、大阪、京都、長崎を訪問した。全行程は約2年弱、日本では約70日滞在している。ムスタファは自身の見聞を旅行記『Aksâ-yı Şark'ta Bir Cevlân (極東逍遙)』にまとめてアブドゥルハミット二世に献呈し、現在イスタンブール大学稀覯書図書館に保存されている。旅行は日本に特化されたものではなかったとはいえ、管見の限りでは、オスマン帝国人による最古の日本見聞記である。ムスタファの旅行は、エルトゥールル号で果たせなかった東南アジア・東アジア地域のムスリムの動向を探るアブドゥルハミット二世の意向が背景にあったと考えられる<sup>25</sup>。旅行記はアフメット・ウチャル (Ahmet Uçar) によって2010年に公開されている<sup>26</sup>。

1893年には、日本人野田正太郎と山田寅次郎の日本語学生だった士官学校生ピヤード・ミュラーズム (Piyade Mülazım)、ムスタファ・アースム (Mustafa Asım) が、『Mecmua-i Lügat, Türkçe, Japonca, Fransızca (辞書雑誌、トルコ語、日本語、フランス語)』という題名の辞書を編纂した。公開されたかは不明だが、

---

24 İstanbul, Matb'a-i Eb'z-Ziyâ, 1309/1891, 10 x 14 (7 x 12) cm. 408+4 sayfa.

25 詳しくは、ジラルデッリ青木美由紀「亜細亜東西合鏡——オスマン帝国の官僚ムスタファ・ビン・ムスタファの見た明治と明治の官僚渡辺洪基の見たオスマン帝国」、第53回日文研国際研究集会「世界史のなかの明治/世界史にとっての明治」(2018年12月14日～16日) 予稿集、1-10頁。

26 Mustafa bin Mustafa, Ahmet Uçar (ed.), *Bir Osmanlı Bürokratın Uzak Doğu Seyahati*, Çamlıca Yayınları, İstanbul, 2010.

この著作は、トルコ語による最初のトルコ語・日本語辞典といえる<sup>27</sup>。

この時代、伝統的にトプカプ宮殿に収集されていた中国・日本の磁器とは別に、ヨーロッパのジャポニズムの流れを受けて、宮廷の調度品にも日本趣味が現れた。分量としては依然陶磁器が最も多いが、家具、照明、煙草用品、服地、傘など多様な日本品が現存している。これらは、日本からの直接の輸出品とともに、ヨーロッパから輸入されたもの、あるいはヨーロッパ製の日本風製品も含まれる。宮廷では、柿や竹など日本の植物、日本の鳥類なども輸入され、飼育栽培された。

20世紀になると、オスマン帝国人の日本についての著作には、軍人が目立つようになる。前後して、外国語文献からの翻訳による日本研究が登場するようになる。メフメット・ヒルミー (Mehmet Hilmi) によるおそらく英語からの翻訳歴史書『Mühim bir Ders-i Tarihî (歴史からの重要な教訓)』<sup>28</sup> (1900年ごろ) が出ており、日本への言及がある。著者はトッテンハム (Totenham) と表記があるが、原典は不明である。

1901年、義和団の乱で過激化した中国ムスリム軍団と対話するべくドイツのヴィルヘルム二世から要請され、アブドゥルハミット二世が上海に派遣したエンヴェル・パシャ以下5名のオスマン帝国の代表団は、帰路、長崎に停泊し、将校のコルアアス・ナズム・パシャ (Kolağası Nazım Paşa) は、長崎についての短い覚書を日記に記している。

1903年、中央アナトリアの街ビレジック出身という以外経歴不詳のナムク・エクレム・アーヤンザーデ (Namık Ekrem, A'Yan-Zâde, 生没年不詳、1912年に健在) は、“Kont Bovoir” の日本旅行記を翻訳し、新聞『Musavver Terakki Gazetesi (絵入り進歩新聞)』に連載、のちに単行本『Japonya Sularında (日本の水辺で)』を出版している。オスマン語の文献に登場する著者「Kont Bovoir」は、1865～1867年に世界旅行をしたフランス貴族のルドヴィク・ド・ボーヴォワール公爵 (Comte Ludvic de Beauvoir, 1846-1929) と考えられる。同公爵は、オーストラリア、インドネシア、タイ、中国、日本を訪問し、旅行記

---

27 Kurşun 2010, p. 192 と注 13 公刊されたかは不明の著作の原本は、İBB, Atatürk Kitaplığı Bel-Yz K.000751 の番号で登録されている。

28 Totenham, Mehmet Hilmi (çev.), Mühim bir ders-i tarihî, Dersaadet, İstanbul, 1900?

を出版しているが<sup>29</sup>、オスマン帝国では、日本の部分のみが抜粋されて出版されている。ナムク・エクレム名義の著作としては、本作の他に『Faideli Türkçe Sarf. Hicran ve Makalat-ı Güzide』、『Anadolu'da bir Cevelan (アナトリア旅行)』の2作が知られている。

## 5. 日露戦争以後

オスマン帝国の日本への関心が劇的に高まるのは、日露戦争で日本が辛くも勝ち取った勝利の後である。見学将校として同戦争に参加したペルテヴ・パシヤ（後の名をペルテヴ・サイート・デミルハン Pertev Sait Demirhan, 1871-1964）が執筆し、アブデュルハミット二世に献呈した報告書が知られる。報告書は何度も再版され、メルトハン・デュンドル（Merthan Dünder）、ドルック・アクユズ（Doruk Akyüz）などによって現代でも数種再版されている<sup>30</sup>。ペルテヴ・デミルハンは日土国交が正式に樹立される前の非公式の大使とも言える存在で、日露戦争当時2ヶ月日本に、満州に1年近く滞在し、見聞を詳細に報告した他、著作活動や講演なども行い、専門家として日露戦争を分析したにとどまらず、日本社会をオスマン帝国に紹介した人物として知られる。1931年に退役後、三期国会議員を務めた政治家でもあり、トルコ語、ドイツ語、英語による16の著作がある。

1904年には、フランスの絵入り新聞『Le Tour de Monde』に掲載されたフランス人 Moj による日本旅行記が、アリ・ムザッフェール（Ali Muzaffer）による翻訳で『Japonya'da Seyahat (日本の旅行)』<sup>31</sup>として刊行されている。フランスでは1855年の中国、2年後の日本への旅行が連載されたが、オスマン語訳では日本の部分だけが抜粋された。Moj とは、1858年、フランスと江戸幕府の間にかわされた日仏友好通商条約の締結のため、シャルル・ド・シャッソン

---

29 Le Comte Ludovic de Beauvoir, *Voyage autour du monde: Australie, Java, Siam, Canton, Pékin, Yeddo, San Francisco*, Paris, Plon, 1867.

30 Doruk Akyüz, *Bir Osmanlı Kurmayının Gözüyle Rus-Japon Harbi: Miralay Pertev Bey'in Gözlemleri*, Dergah Yayınları, İstanbul, 2017, A. Merthan Dünder, *Rus-Japon Harbinden Alınan Maddi ve Manevi Dersler ve Japonların Başarılarının Sebebi*, Gece Kitaplığı, 2016.

31 İstanbul, Hanımlara Mahsus Gazete Matbaası, 1322/1904, 13.5 x 18 (6 x 12.5) cm, 60 sayfa.

(Charles de Chasson, 1818-1871)、グロス男爵 (Baron Gros, Jean-Baptiste Louis Gros, 1793-1870) に同行したフランスの外交官アルフレッド・ド・モージュ侯爵 (Marquis Alfred de Moges, 1830-1861) とと思われる。本書翻訳者の経歴は不詳だが、同名の著者によるエチオピアに関する著作『Habeşistan Hakkında Malûmat-ı Mücmele (エチオピア要報)』(1903年)が知られている。

また同年、中学校の地理学・科学教師、文化教育省管理職などを歴任したメフメット・アーリフ (Mehmet Arif, 1868-?; 1911年に健在) による日本についての著作『Musavver Yeni Japonya (絵入り新日本)』<sup>32</sup>が出版されている。日本の歴史、宗教、社会構造、地理についての著作で、日本の地理、歴史概観、農業、1895年の日清戦争、その結果植民地として得た台湾の地理的特徴、北海道、軍事状況、交通・通信手段、一般的教育、初等教育を中国人から学んだこと (すなわち漢文の素養)、現存の学校数と生徒数、日本陸海軍の状況、日本人の信仰、商業、工業などについて、挿絵・地図入りで述べられている。日本、日本人についての先行著作を数多く参考にしており、近代日本の登場について言及した点で画期的とされる。

日露戦争関係としては、同年、著者名・出版社は不明ながら、アラビア語の書籍『Mucemül-lisan fi harbi'r-Rus ve'l-Yaban』がベイルートで出版されている。

ドルマバフチェ宮殿アブドゥルメジット・エフェンディ図書館には、日本の文化、歴史から日露戦争日本海海戦の時事刻々の船の位置までを詳述した5巻本『Musavver Rus Japon Seferi (図解日露戦争)』<sup>33</sup>が所蔵されている (所蔵番号 Inv.no. K16)。著者は、オスマン帝国海軍の二人の将校オスマン・セナーイー少佐 (Osman Senai (Erdemgil)) とアリ・フアッド大尉 (Ali Fuad (Erden)) である。第1巻はロシア帝国、日本帝国についての概要で、日本の社会構造、歴史、地理、陸海軍、日本文学、文化、芸術について、第2巻は東郷元帥の紹介、8月10日の戦い (1904年の黄海海戦、日本艦隊のロシア旅順艦隊との交戦) その他の戦闘について、第3巻は旅順港とその守備、図版・地図入り、第4巻は戦闘について、第5巻は対馬海戦とバルチック艦隊の最後、ポーツマス条約関連について

32 İstanbul, Şirket-i Mürettebiye Matbaası 1322/1904, 14 x 20 (9.5 x 16) cm, 112 sayfa, resimli.

33 Osman Senai (Erdemgil), Ali Fuad (Erden), Musavver Rus Japon Seferi, Kitabhane-i İslam ve Askeri, İstanbul, 1321/1905-06.

て述べられている。

1909年には、シミノフ (Siminof) という人物によるロシア語の原典の英語訳から M・ムヒッディン・ハサン (M. Muhyiddin Hasan) によるオスマン語への重訳という形で、日露戦争の海戦についての書物『Coşima deniz meydan muharebesinde: Moskof donanmasının perişanlığı (ジョシマ [筆者による訳注: 対馬] 海戦で: モスコフ艦隊の惨敗)』が出版されている。著者は、ロシア軍バルチック艦隊艦長のウラディミール・スミノフ (Vladimir Semenov) で、彼自身が参戦した1905年の対馬海戦の記録である。同著者は、1904年の黄海海戦も率いた人物であり、オスマン語による出版は未確認だが、この海戦についても記録が出版されている。翻訳者は、テサロキニキの港湾局長との肩書きがある。

同著者による別の著作『Kaptan Vladimir Semenov'un Ruznamesi ve çuşima muhârebe-i bahriyesi (ヴラディミール・セメノフ船長の日誌とチュシマ [対馬] 海戦)』<sup>34</sup>も、別の翻訳者ナヒッド (M. Nahid) のオスマン語訳によって1912年に出版されている。翻訳者のナヒッドは、トゥルグット・レイス・ズルフ・ヒュマーユーン (オスマン海軍) の技術者との肩書きがある。

大変興味深いのは、1911年にニューヨークで、おそらくトルコ人と思われる著者アフメット・ファズル (Ahmed Fazlı) による、日本の近代化についてのオスマン語の著作『Kitabu Sırrı Tekaddümi-l Yaban (日本の発展の秘密の本)』<sup>35</sup>が出版されている点である。

1912年出版の2巻本『Coğrafya-yı İktisadi (経済地理学)』<sup>36</sup>では、第1巻がオスマン帝国、イラン、アフガニスタン、モロッコの経済地理、第2巻が英国、アメリカ、ドイツ、フランス、オーストリア、ハンガリー、ポルトガル、ルーマニア、ブルガリア、セルビア、モンテネグロ、ギリシャ、ブラジルとともに、日本が取り上げられている。オスマン帝国と直接関係のある近隣諸国、世界経済の主要国とともに日本が取り上げられている点、注目に値する。著者のメフメット・フルハネッディン (Mehmed Burhaneddin, 1868-1941) は、オスマン帝国財務省に長く務められたわら高校で地理学を講じ、トルコ共和国でも財務監

34 Vladimir Semenov, M. Nahid (çev.), Kaptan Vladimir Semenov'un Ruznamesi ve çuşima muhârebe-i bahriyesi, İstanbul, 1328 R 1912 M.

35 Ahmed Fazlı, *Kitabu Sırrı Tekaddümi-l Yaban*, New York, 1329H 1911M, 152s, 12res.

36 İstanbul, Edeb Matbaası 1328/1912, 732 sayfa.

察長官、関税監察長官、トルコ中央銀行の役職などを歴任した人物である。

トルコ人による直接の日本研究ではないが、アブドゥルメジット・エフェンディ図書館には、坪内逍遙『浦島』のフランス語訳本（1912年刊）も所蔵される。フランス語や英語、ドイツ語などヨーロッパの言語を介して日本についての情報を得ていたことを示す歴史的証拠として注記できる。

タタール系ロシア人でのちにオスマン帝国国籍を取得し、イスタンブルを拠点として日本についての著作をした人物として、イスラーム教の宗教家、イスラーム法学者、政治活動家、ジャーナリスト、旅行家のアブドゥルレシット・イブラヒム（Abdülreşid İbrahim, 1857-1944）がいる。帝政ロシア統治下でのムスリム政策に対する政治活動後、各国を経てオスマン帝国国籍取得、オスマン帝国人として伊土戦争、バルカン戦争、第一次世界大戦を経験し、ロシア革命後ロシアに帰国、大日本帝国陸軍のムスリム政策とも大きく関わった人物である。1907年に中央アジアのブハラ、サマルカンド、セレミチエへの旅、1908～1909年にシベリア、モンゴル、満州、日本、韓国、中国、シンガポール、インドネシア、インド、ヒジャーズ（アラビア半島の紅海沿岸地方）をめぐる旅行をし、著作『Âlem-i Islâm（イスラーム世界）』（第1巻1910年刊、第2巻1913年刊）として纏めた。アブドゥルレシット・イブラヒムは、日本の汎アジア主義者たちと繋がりがあり、ハサン波多野鳥峰（1882-1036）執筆の小冊子『危機に瀕する亜細亜』を、1912年、日本人メフメット・ヒルミ・ナカヴァ（Mehmed Hilmi Nakava）と共訳で出版している<sup>37</sup>。ロシアではペレストロイカ以降、トルコでは1987年にメフメット・パクスによるトルコ語訳が刊行されて以降、研究が盛んになった<sup>38</sup>。約半年滞在した日本について概ね肯定的に詳述されており、本書の日本イメージが各国のムスリム読者に与えた影響は大きかったという。イブラヒムは1933年日本政府に招かれて日本に再渡航、1938年に設立された東京ジャーミイの初代イマームとなり、東京で没した。彼の日本滞在記は、1991年小

---

37 Hatano, (çev.) Mehmed Hilmi Nakava (Japonyalı), Abdürreşid İbrahim, Asya tehlikede, İstanbul, 1328R 1912M.

38 小松久男「国際シンポジウム アブドゥルレシット・イブラヒムとその時代——トルコと日本の間の中央アジアユーラシア空間」報告、東京外国語大学 (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/nihu/meeting/2014/20140524/index.htm>)。

松香織・小松久男によって日本語にも翻訳されている<sup>39</sup>。

短期間で近代化し、日露戦争でロシアに勝利した「日本人を見習え」という風潮は、サティ・ベイの講演録『Büyük Milletlerden Japonlar, Almanlar: İki konferans (偉大な国民より、日本人、ドイツ人：二つの講演)』<sup>40</sup>に反映されている。また、外国語の翻訳から情報を得る試みは続き、イティジカヴァ (İticikava) なる人物によるドイツ語文献『Japonya tarih-i siyasisi (日本の政治史)』が、ムバーハット (Mubahât) によって翻訳され、1914年に出版されている。

1910年代にオスマン帝国内で発行された日本関連の著作には、ほかに雑誌『Genç Kalemler (若き筆)』に掲載された末松謙澄 (1885-1920) の論文オスマン語訳『Garp Medeniyetinin Japonya'ya Dühülü (西洋文明の日本への導入)』がある。これは、1905年に末松が英国で出版した論文集『The Risen Sun』<sup>41</sup>に掲載の論文「The Introduction of Western Civilization into Japan」の無記名の筆者による導入とまとめを入れて、1911年に3回掲載された<sup>42</sup>。のちに通信大臣、内務大臣を歴任、伊藤博文の娘婿でもあった末松は、英国大使館付一等書記官見習いとして英国に留学、ケンブリッジ大学で法学士の学位を取得した人物で、源氏物語の最初の英訳者、英文による源義経＝ジンギスカン説の提唱者として知られる。ロンドン留学中は、国史編纂の責任者重野安繹の命により、英仏歴史編纂方法の取り調べに従事し、傍らで日本の歴史や文化について早い時期から英語で発信していた人物である。翻訳された論文は、日露戦争時のもので、日本の勝利によって日本への興味が喚起されたものと見て良いだろう。翻訳者は不明である。

中等・高等教育における地理学教科書中の日本への記述も、この時期依然として続いている。1911年出版、経歴不詳のメモドゥフ・スレイマーン (Memduh Süleyman, 生没年不詳、1912年に健在) による『Mufasssal Yeni Coğrafya-yı

---

39 アブドゥルレシット・イブラヒム『ジャポンヤ』小松香織・小松久男訳、第三書館、東京、1991年。

40 Satı Bey, Büyük Milletlerden Japonlar, Almanlar: İki konferans, Desaadet, İstanbul, 1329/1913.

41 Suematsu Kencho, The Risen Sun, London, Constable, 1905.

42 川原田喜子「国交樹立以前の文献からよみとくトルコ人の日本観、日本人のトルコ観」東京外国語大学、2009年、19頁。

Umūmī (章別地理総論)』<sup>43</sup> は、中等学校、王立学校の最終学年向けに書かれたもので、日本への言及がある。2巻本で、第1巻が自然と地形、ヨーロッパ地理、第2巻がアジア、アフリカ、アメリカ、オセアニアの構成である。どの地域についても、自然地形、国々の政治、社会、経済、国境、人口、面積、地形について触れてある。

筆者の探索には限りがあるので、今後、オスマン帝国で行われた日本研究、この時代に出版された文献について、諸氏のご教示を仰ぎたい。現時点で、以上の限られた情報からオスマン帝国時代の日本研究を概観すると、最初期の17世紀ごろから、地理学の分野で研究が始まったことがわかる。オスマン帝国において地理学は、イスラーム科学の伝統と西洋の地理学の両方の成果を受けて独自に発達した分野であり、自然科学、測量学、地図学だけでなく天文学や政治学、経済学、歴史学とも結びつく「世界を把握する方法」であった。日本はその中で、他の国々とともに、世界を構成する国々の一つとしてオスマン帝国の人々に認識された。

19世紀後半になると、このころ整備された近代的な中等・高等教育制度の中で、中・高等学校の地理学教師、あるいは軍事学校教師による研究が大きな役割を果たしていたことがわかる。ことに地理学教科書中で取り扱われた日本についての情報・分析は、他の国々ともになされるものであったにせよ、知識を広く一般に広める効果があったと考えられる。

日本について独立した関心が芽生えるのはむしろ遅く、1890年代ごろを境にしている。これは、その前後に始まった日本との直接の接触、外交関係樹立の試みとともに、日清日露の戦争を経て、近代国家として短期間のうちに国際社会で頭角を現した同じ東洋の国としての認識からである。

日本に関する情報は、最初は主に英語・フランス語の文献から入っており、直接の情報収集は日露戦争前後までは見られない。単独に日本に関する著作も、フランス語・英語・ドイツ語など西洋語の原典からの翻訳から始まっている。少数とは言え、メフメット・ゼキ、バルテヴ・サイト・デミルハン、アブドゥルラシット・イブラヒム、メフメット・アーリフらの仕事は、日本を分

---

43 第1巻 : İstanbul, Matbaa-i Hukukiye, 1329/1911, 13 x 19 (9.5 x 15) cm, 312 sayfa, 第2巻 : İstanbul, Matbaa-i Hukukiye, 1330/1912, 13 x 18.5 (10 x 16) cm, 277 sayfa.

析する独自の試みとして注目に値する。

## 6. トルコ共和国初期の日本研究

オスマン帝国が崩壊し、トルコ共和国の建国は、第一次世界大戦後ローザンヌ条約（1923年）を経て国際社会に認められ、翌1924年、日本とトルコはようやく対等な関係で国交を結んだ。トルコにとって国事多難だった1920年代には、日本研究に関する著作は、管見の限り、見つけることができなかったが、ここに日土関係は新たな段階に入る。国交樹立の翌年1925年には東京にトルコ大使館が、イスタンブルに日本大使館がそれぞれ開設、日土貿易協会が創立され、さらに翌1926年には、日本側で日土協会が発足した。日本からの発信であるが、1930年に、この日土協会がおそらくトルコ人向けに『Bugünkü Japonya (今日の日本)』<sup>44</sup> というトルコ語冊子を発行している。また、おそらくキリスト教のミッション系と思われるが、キリスト者で協同組合の提唱者賀川豊彦についての小冊子が同年トルコ語で出版されている<sup>45</sup>。

この頃、学術研究というよりは、オスマン帝国崩壊後の荒廃・疲弊した産業構造を革新するべく、両国の合弁による最初の産業提携・共同事業が立ち上がった。西本願寺の元門主・大谷光瑞によって立ち上げられた事業は3都市・3事業ある。ブルサの旧家メンドゥフ・ベイ（のちのギョクチェン家）の間に絹織物染色工場、アンカラのアタチュルク農場で香水工場、イスタンブル・カラキョイに貿易会社が存在した。日本から技術者や若い学生を定住させてトルコ語を学ばせ、日本の技術を伝えた。ブルサでは、トルコ国内市場向けヨーロッパの絹織物ジャガードやシフォンなどのみならず、少量ながら羽二重、山谷織、金波織など日本の絹織物も生産された。その意味では、産業提携は、トルコ側にとっても日本を「研究」する生きた機会でもあった。事業は、1928年から1932年までの短い間続いた<sup>46</sup>。

1930年代、トルコ政府関係機関による日本関連研究の出版が目立つ。ラフミー・ユルドゥルムオウル（Rahmi Yıldızoğlu）による『Soya: sınai bitkilerden

44 Türk-Japon Cemiyeti, Bugünkü Japonya, Tokyo, (yayınevi belirsiz), 1930, 45-2 sayfa.

45 Galen Fisher, Kagawa Japonya Metruklarının Dostu, Selamet Matbaası, İstanbul, 1930 Kagawa Toyohiko, 13s.

46 Minako Mizuno Yamanlar and Şüküfe Gökçen (eds.), *The Turkish Japanese Factory 1928: History Woven in Bursa*, Ege Yayıncılık, İstanbul, 2015.

soya fasulyesi-Japonfasulyesi: (soya hispida Moench) (大豆：産業的植物としての大豆－日本豆)』<sup>47</sup> は、1936年、食物、農業、畜産省の種苗研究所から、また、日本の人口についてのイノウエマサジ（アジア主義者の井上雅二、1877-1947?）の著作<sup>48</sup> が、1938年にトルコ統計庁から出版されている。

日本側からの働きかけか、トルコ側の自発的な動きによるものかは不明だが、トルコに日本を紹介する著作も、トルコの出版社から1933年に一つ<sup>49</sup>、ファイク・サブリ・ドゥランによる『Bugünkü Japonya (今日の日本)』<sup>50</sup> が1938年に、いくつか相次いで見える。

同年、著者不明ながら、子供向けの日本のおとぎ話がトルコ語で出版されている<sup>51</sup>。子供向けおとぎ話は、1944年にケマル・カヤ（Kemal Kaya）著の世界のおとぎ話集<sup>52</sup>の中でも、ドイツ、フィンランド、デンマーク、ベルギー、イタリア、ラップランド、ミクロネシアとともに日本が取り上げられており、第二次世界大戦後も、ケマル・チャグダシュ（Kemal Çağdaş）翻訳の『Dünya Çocuk Masalları (世界のおとぎ話)』（1949年）でも、日本の話が収録されている<sup>53</sup>。日本のおとぎ話を収録したものではなく、日本を舞台にしたトルコ人による創作物語として、「日本への旅（Japonya'ya Seyahat）」が、「中国の旅」、「チベットで何を見たか」、「シベリアでの三ヶ月」とともに1932年に出版されている<sup>54</sup>。

直接的な「日本研究」ではないが、日本が舞台のオペラ、プッチーニのマダ

---

47 Rahmi Yıldızoğlu, Soya: sinai bitkilerden soya fasulyesi-Japonfasulyesi : (soya hispida Moench), Gıra, Tarım ve Hayvancılık Bakanlığı Yeşilköy Tohum Enstitüsü, İstanbul, 1936 fotoğrafı, 43 s.

48 Inoue Masaji, Osman Derinsu (çev.), Japonya Nüfusu, Başvekalet İstatistik Umum Müdürlüğü, Başvekalet İstatistik Umum Müdürlüğü Neşriyet no. 118, Tetkikler Serisi Sayı 65, Anlara, 1938.

49 Bugünkü Japonya, Muallim Ahmet Halit Kitaphanesi, İstanbul, 1933, 103 s.

50 Faik Sabri Duran, Bugünkü Japonya, Yedigün, İstanbul, 1938 32s.

51 (Yazar belirsiz), Japon efsaneleri : I. kamo - Yamato nasıl imparator oldu? - II. cesur asilzade ve korkunç ejderha - III. beş fırçalı sihirbaz - IV. prenses pembe gül - V. ejderhalar kıralın sarayında, Kanaat Kitabevi, İstanbul, 1938.

52 Kemal Kaya, Dünya çocuk masalları : Alman, Danimarka, Fin, Flâman, İsveç, İtalyan, Japon, Lâpon, Mikronez masallarından seçmeler I, İbrahim Berkalp Yayınevi, Ankara, 1944.

53 Kemal Çağdaş (çev.), Dünya Çocuk Masalları, Berkalp Yayınları, Ankara, 1949.

54 Kanaat Kütüphanesi, Çin'de seyahat, Kanaat Kütüphanesi, İstanbul, 1932.

ム・バタフライのテキストが『Madam Batrfly: bir Japon kızının trajedisi: opera 3 perde (マダム・バタフライ：ある日本娘の悲劇：オペラ三幕)』<sup>55</sup>としてトルコ語訳され、国立オペラ・コンセルヴァトワールから出版されている。

日露戦争関係の出版物も、1930～40年代を通じて出版され続けている。1932年にはH・ウィルソンなる人物<sup>56</sup>、「イイムラ」なる人物<sup>57</sup>による日露戦争についての著作が相次いでアンカラで出版され、海軍提督・作家のセルメット・ギョクデニズ (Sermet G, kdeniz, 1905-1979) による日露戦争の本『Rus-Japon Harbi: 9-Şubat-1904-5-Eylül-1905 (日露戦争 1904年2月9日～1905年9月5日)』(1944年)<sup>58</sup>は、トルコ軍からの出版である。同戦争の見学将校ペルテヴ・デミルハンによる著作『Japonların Asıl Kuvvetleri: Japonlar niçin ve Nasıl Yükseldi? (日本人の底力：日本人はなぜ、どのようにして発展したのか?)』(1938年)<sup>59</sup>、『Rus-Japon Harbi 1904-1905 (日露戦争 1904-1905)』(1943年)<sup>60</sup>も、版を重ねて出版されている。

1937年には、トルコ政府供出金によるエルトゥールル号慰霊碑が完成し、除幕式と2年繰り上げの遭難50周年追悼祭が同時に開催された。在日本トルコ大使館は、この機会に『土耳其軍艦エルトグルル号』(駐日土耳其大使館編、1937年)を刊行、本書は同内容のものがフランス語でも出版された。

ドイツの軍人、政治地理学者で知日家、親ナチ派として影響力の大きかったと言われるカール・ハウスホーファー (Karl Haushofer, 1869-1946) の日本についての著作『Japan baut sein Reich (日本とその国民)』<sup>61</sup>が、ドイツで出版され

---

55 Giacomo Puccini (1858-1924), Madam Batrfly : bir Japon kızının trajedisi : opera 3 perde = (Madame Butterfly), Devlet Konservatuarı Opera Metinleri Neşriyatı, Ankara, 1941.

56 Wilson, H. Rus-Japon Harbi, Büyük Erkanharbiye Reisliği Matbaası, Ankara, 1932.

57 İimura, Rus-Japon Harbi 1904-1905: İimura'nın Tenkitleri, Büyük Erkanharbiye Reisliği Matbaası, Ankara, 1932 26s., İimura, Rus-Japon 1904-1905 harbine dair verilen Konferans, Büyük Erkanharbiye Reisliği X. Şube, Ankara, 1932 38s.

58 Sermet Gökdeniz, Rus-Japon Harbi: 9-Şubat-1904-5-Eylül-1905, Genelkurmay Başkanlığı IX. Şube, (Yayın yeri yok), 1944.

59 Pertev Demirhan, Japonların Asıl Kuvvetleri: Japonlar niçin ve Nasıl Yükseldi?, Cumhuriyet, İstanbul, 1937 93 s.

60 Pertev Demirhan, Rus-Japon Harbi 1904-1905, Matbaa-i Ebüzziya, İstanbul, 1943.

61 Karl Haushofer, *Japan baut sein Reich*, Zeitgeschichte-Verlag Wilhelm Undermann, Berlin, 1941.

た同じ年に、トルコでもガーリップ・ケマリ・ソイレメズオウル (Galip Kemali Söylemezoğlu, 1873-1960) によるトルコ語訳で『Japonya ve Japonlar (日本及び日本人)』<sup>62</sup>として出されている。このスピードは当時の国際的政治状況の中で日本への関心の高さを知るうえで興味深い。翻訳者は1930年までギリシャ、イラン、ロシア大使を歴任した外交官で、上記のエルトゥールル号記念式典と出版を行なった当時の駐日トルコ大使ヒュスレヴ・ゲレデ (Hüslev Gerede) は、娘婿である。

1943年にはジャーナリスト・文筆家・歴史家のズイヤー・シャーキルが読み物『Abdülhamit ve Mikado (アブドゥルハミットとミカド)』を出版、翌年には岡倉天心『茶の本』のトルコ語訳が、医師で作家・詩人のアリ・スハー・デリバシュ (Ali Süha Delibaşı, 1887-1960) により出ている<sup>63</sup>。

## 7. 第二次世界大戦以降——国交断絶を超えて

第二次世界大戦では、末期の1945年になって両国は国交断絶、アンカラの日本大使館は閉鎖、トルコは日本に宣戦布告した。断絶は戦後も数年間続き、1952年になってようやく再開している。

第二次世界大戦前後には、日露戦争関連の出版とともに、日本を敵国として、あるいは成功した軍事国家として研究する著作が散見される。ムスタファ・アカンセル (Mustafa Hakkı Akansel) は、『日本の奇跡、そしてそこから我々が学べる教訓』<sup>64</sup>で、日本の軍国政策を分析し、トルコが見習うべき点を議論している。

1945年には、ボルシェヴィキの活動家グレゴリー・ビエンストック (Gregory Bienstok, 1884-1959) による英語の著作『太平洋戦争への葛藤 (The Struggle For The Pacific)』<sup>65</sup>のトルコ語訳<sup>66</sup>がトルコ軍事省から出ており、翻訳者は不明なが

---

62 Haunhafer, Geueral, çev. Galip Kemali Söylemezoğlu, Japonya ve Japonlar, Ahmet Sait Matbaası, İstanbul, 1941.

63 Okakura Kakuzo, Ali Süha Delibaşı (çev.), Çayname, Remzi Kitabevi, İstanbul, 1944.

64 Mustafa Akansel, Japon Mucizesi, Çınaraltı Yayın, İstanbul, 1943.

65 Gregory Bienstok, *The Struggle for The Pacific*, Allen and Unwin, London, 1937.

66 Gregori Bienstok, H. Gürgüç (çev.), Pasifik için Mücadele, 1-2, Genelkurmay Başkanlığı, Ankara, 1945.

ら、日本の柔術を紹介する書籍『柔術：自分自身を守る芸術』（翻訳者不明）<sup>67</sup>も出版されている。本書は副題に「世界中の軍隊、スポーツクラブ、学校で授業カリキュラムに取り入れられている有名な日本のスポーツの奥義と適用法」とある。

1950年代になると、日本に関して、第二次世界大戦を総括する書籍が登場する。シェレフ・カラプナル（Şeref Karapınar）による『日本は第二次世界大戦にどう進んでいったのか』（1954年）<sup>68</sup>、ファヒル・アルマオウル（Fahir Armaoğlu）による『日米関係の10年 1931-1941』<sup>69</sup>がある。1952年のトルコのNATO加盟を受けての動きと見ることができる。ルース・ベネディクト『菊と刀』のトゥルキャン・トゥルグット（Türkan Turgut）の翻訳による刊行<sup>70</sup>も、この流れで見ることができる。

広島・長崎への原爆投下は、世界の他の地とトルコの社会一般にも大きな衝撃を与えた。世界的に著名なトルコの左翼詩人、ナーズム・ヒクメット（Nazım Hikmet）の仕事には、「Kız Çocuğu（少女；日本では「死んだ女の子」の題名で知られる）」（1956年）、「Japon Balıkçısı（日本の漁師）」、「Bir Kız Vardı, Japonya'da（一人の少女がいた、日本に）」、「Radyoaktiviteli Yağmurlar Üstüne（放射能の雨の後に）」（1963年）など日本に関連した詩作が知られる。特に、1956年作の「少女」は、各国語に翻訳された。

トルコでは、音楽家、俳優、詩人、政治家のズルフ・リヴァネリ（Zülfü Livanlı, 1946-）がこの詩に曲をつけた「Nazım Türksü（ナーズム哀歌）」を作曲して発表し、のち世界中で歌われるようになる。アメリカではロック・フォークバンドのザ・バーズ（1966年）、フォークバンド、デイス・モータル・コイル（1991年）、歌手ピーター・シーガー（1999年）によってカバーされた。日本では、

---

67 Alfred Bauman, Jiu Jitsu: kendi kendini müdafaa sanatı :bütün dünya orduları, spor klüpleri ve okulları tarafından ders programlarına kabul edilen meşhur Japon oyunlarının incelikleri ve tatbik şekilleri, Güven Yayınevi, İstanbul, 1945, 63s. resimli.

68 Şeref Karapınar, Japonya İkinci Dünya Harbine Nasıl Girdi, Deniz Kuvvetleri Komutanlığı, Anlara, 1954.

69 Fahir H. Armaoğlu, Amerikan Japon Münasebetinin on yılı, 1931-1941, Ankara Üniversitesi Siyasal Bilgiler Fakültesi, Ankara Üniversitesi Siyasal Bilgiler Fakültesi Yayınları, 1956, IX, 242s.

70 Ruth Benedict, (çev.) Türkân Turgut, Krizentem ve Kılıç, Türkiye İş Bankası Kültür Yayınları, Ankara, 1966.

元ちとせ（2006年）、高石友也（1967年）などが歌っており、映画『キタピラー』（若松孝二監督、2010年）の主題歌にもなった。ナーズム・ヒクメットによる原詩は、被曝の10年後に少女のまま亡くなった佐々木禎子に触発されたことされる。直接の日本研究ではないが、トルコにおける日本関連の活動として、おそらく現在までに最も大きな影響力のあったものと言える。この文脈で、長田新『原爆の子——広島少年少女の訴え』が、アラアッティン・ビルギ（Alaattin Bilgi）によってトルコ語訳され、『Atom Bombası Çocukları』<sup>71</sup>として1968年に出版されている。

1960年代以降、川端康成、三島由紀夫など日本文学の翻訳本の出版が目立つ。これは川端康成のノーベル文学賞受賞（1968年）を受けてのことだが、英語やフランス語版からの重訳で、文学において日本語からの直接訳の登場は1990年代頃まで待つことになる。それ以前にも、L. Sami Akalınによる翻訳で『Japon şiiri tarih ve antoloji（日本の詩歌選集）』<sup>72</sup>、ソンメズ・カトマン（Sönmez Katman）による翻訳で日本・中国・インドの文学選集である『Kokinshu（古今集）』（1965年）<sup>73</sup>、外交官のユルマズ・チョルパンによる演劇についての著作『日本の演劇 中国の演劇』（1964年）<sup>74</sup>がある。

チョルパンの著作の表題は、子供でも知っているトルコの古い語呂合わせで、性関係の暗喩に使われる「Çin işi Japon işi（中国細工、日本細工）」の語呂を踏まえたもので、日本はトルコ人にとって、オリエンタリズムの対象として性的なユートピアとして見られる一面もあった。その文脈の著作として、ギュネル・アルトゥンタシュ『Çin işi Japon işi: Erotik şiirler（中国細工、日本細工：エロティック詩集）』（1974年）<sup>75</sup>があり、最近ではこれを文化人類学的に分析したタイフン・アタイの著作『Çin işi Japon işi: Cinsiyet ve Cinsellik Üzerine Antropolojik Değiniler（中国細工、日本細工：性と性関係についての語呂合わせの

---

71 Arata Osada, Alaattin Bilgi (çev.), Atom Bombası Çocukları, Sol, Ankara, 1868.

72 (Yazar Adı yok), L. Sami Akalın (çev.), Japon şiiri tarih ve antoloji, Varlık Yayınevi, İstanbul, 1962.

73 Ki, Tsurayuki, Sönmez Kantman, Kokinshu: Japon, Çin ve Hint Edebiyatı ile bir Çevir Denemesi, Yenilik Basımevi, İstanbul, 1965.

74 Yılmaz Çorpan (der.), Japon Tiyatrosu Çin Tiyatrosu, İzlem Yayınları, İstanbul, 1864.

75 Günel Altuntaş, Çin işi Japon işi: Erotik şiirler, Seçme Kitaplar, İstanbul, 1976.

人類学』(2012年)<sup>76</sup>が出ている。

日本の高度成長期以降の発展をトルコ近代化の例とする傾向の著作は1960年代にも見られる。オカ・マサヨシ(岡正芳?)他による『日本の復興とトルコ』<sup>77</sup>が文学者・詩人・批評家・出版人のフェティ・ナジ(Fethi Naci)によって翻訳されている。タイヤール・サードウックラル(Tayyar Sadıklar)による『発展の途上における日本の例とトルコ』(1971年)<sup>78</sup>、高度成長に伴う日本の都市化についての先駆的な研究として、アスマン・チェジック『日本における都市化と構造変化』(1973年)<sup>79</sup>が政府機関の国家計画組織から出ている。

日本研究ではないが、日本に関してトルコの社会一般に多大な影響を与えたものとして、アメリカのテレビドラマ『将軍』(1980年9月15日～9月19日)が挙げられる。ジェームズ・クラベルによる小説をテレビドラマ化したもので、三船敏郎や島田陽子が出演し、日本でも同年劇場版が公開、1981年にテレビドラマが放映された。トルコでも、1980年クーデタ後の軍事政権でテレビに1チャンネルしかなかった時代に放映された。本作の影響力は絶大で、トルコの一般大衆の日本イメージはこのドラマによって形成されていると言っても過言ではない。

1980年代には、老舗新聞『ジユムフリエツト(共和国)』の主筆で政治犯として何度も投獄・拷問された知識人、イルハン・セルチュク(İlhan Selçuk, 1925-2010)が出所後発表したエッセイのタイトルが『Japon Gülü(日本の薔薇)』(1988年)で、当時の知識人の困難な状況を、冬の厳しさ、寒さにじっと耐えて最後に花を咲かせる「日本の薔薇」に例え、トルコの「日本の薔薇」は、どこにいるのか?と呼びかけている。この文脈で「日本」は、困難にじっと耐える存在、最後まで希望を失わないものの隠喩として使われている。ちなみに、トルコ語でJapongülüとは一般的に芙蓉のことを指すが、ここでは、冬の寒さに

---

76 Tayfun Atay, Çin işi Japon işi: Cinsiyet ve Cinsellik Üzerine Antropolojik Değıniler, İletişim, İstanbul, 2012.

77 Oka Masayoshi, L. Perceval, (çev.) Fathi Naci, Japon Kalkınması ve Türkiye, Gerçek Yayınevi, İstanbul, 1966.

78 Tayyar Sadıklar, Kalkınma Yolunda Japon Örneđi ve Türkiye, Ayyıldız Matbaası, Ankara, 1971.

79 Asuman Çezik, Japonya'da kentleşme ve yapısal değışme, Devlet Planlama Teşkilatı, Ankara, 1973.

耐えるという特徴から、しばしば同じ名で呼ばれる木瓜（ぼけ）の花を指すものと思われる。

## 8. 本格的日本研究の登場——1980年代以降

以上のような文脈と並行して、学界では、日本についての本格的な研究が始動する。1976年には、日土婦人友好文化協会がトルコで最初の日本語講座を開講、1978年アンカラ大学中国語学科で選択科目として日本語が開講、1986年、アンカラ大学にトルコで初めて日本語日本文学科が開設された。80年代には、イスタンブールのボアジチ大学、アンカラの中東工科大学にも選択科目として日本語が開講した。このころから、学術的な意味で日本研究を専門とする専門家が登場し始める。

最初期の日本研究者として、アンカラ大学日本語学科設立に寄与したプラット・オトカン (Pulat Otkan, 1942-2014; 中国学)、同大学のボズクルト・ギュヴェンチ (Bozkurt Güvenç; 人類学)、人文科学の分野でトルコ人として初めて京都大学で博士号を取得した中東工科大学のメテ・トゥンジョク (Metem Tuncoku; 経済学)、ボアジチ大学のセルチュク・エセンベル (Selçuk Esenbel; 日本史) が挙げられる。

現代では、言語学、歴史、文学などの分野で研究者の活躍が盛んである。言語学ではアイシエ・ヌル・テクメン (Ayşe Nur Tekmen; アンカラ大学)、アイシエギュル・アタイ (Ayşegül Atay; エルジエス大学)、アイドゥン・オズベッキ (Özbek Aydın; チャナツカレ大学)、ナゲハン・アヴダン (Nagehan Avdan; アンカラ大学) などがいる。

文学では、万葉集・紫式部日記の現代トルコ語への翻訳者であるエシン・エセン (Esin Esen; アンカラ大学)、芥川龍之介など日本近代文学研究のオウズ・バイカラ (Oğuz Baykara; ボアジチ大学)、夏目漱石研究のハビーベ・サルアール (Habibe Salgar; アンカラ大学)、大江健三郎研究のヌーライ・アクデミル (Nuray Akdemir; アンカラ社会科学大学)、現代文学研究で村上春樹の翻訳者アリ・ヴォルカン・エルデミル (Ali Volkan Erdemir; エルジエス大学)、トルコ文学史における日本語を研究するエミネ・シジム・カプラン (Emine Sicim Kaplan; セルチュク大学) などがいる。

政治・経済では日土の比較研究をするイブラヒム・オズトゥルク (İbrahim Öztürk; マルマラ大学)、バハドゥル・ペフリヴァントゥルク (Bahadır

Pehlivanlı; トルコ経済技術大学)、戦前戦後の日本の経済政策研究のアリ・アクケミック (K.Ali Akkemik; カディル・ハス大学)。

数少ない哲学研究者として、西田幾多郎・京都学派研究のイブラヒム・ソネル・オズデミル (İbrahim Soner Özdemir)。

社会学では日本とトルコの比較研究のバシャック・コジャ・オゼル (Başak Koca Özer; アンカラ大学)、テレビドラマ研究のジェレン・アクソイ・スギヤマ (Ceren Aksoy Sugiyama; アンカラ大学)。

考古学では土頭の頭蓋骨比較研究のイスマイル・オゼル (İsmail Özer; アンカラ大学)、和歌山県串本沖に沈没した軍艦エルトゥールル号の海中発掘のトゥファン・トゥーランル (Tufan Turanlı; ボドルム文化芸術財団) などがある。

歴史学では、明治期から第二次世界大戦までの近代史研究が盛んである。長年日本研究を手がけ、トルコにおけるまとめ役とも言える存在のセルチュク・エセンベル (ボアジチ大学)、日本とトルコの言語政策研究のギュルデミル・オズレンク・アイドゥン (Gülzemin Özrenk Aydın; 通訳、トルコ言語研究所)、福沢諭吉研究のシェイマ・ナルバント・アイハン (Şeyma Nalbant Ayhan; アンカラ大学)、大谷光瑞研究のエルダル・クチュックヤルチン (Erdal Küçükyağcı; ボアジチ大学)、日露戦争から戦間期にかけて精力的に著作のあるメルトハン・デュンダル (Merthan DüNDAR; アンカラ大学)、トルコ文学における日本への関心を研究するバフリエ・チェリ (Bahriye Çeri) などの研究がある。

最後に、美術史学で、日本人だがトルコを拠点とする筆者ジラルデッリ青木美由紀 (Miyuki Aoki Girardelli; イスタンブル工科大学) も、オスマン宮廷の日本趣味研究で「トルコにおける日本研究」の末席に名を連ねることとする。

## おわりに

以上、オスマン帝国時代から現代までを概観すると、特にこの20年ほど、インターネットの発達とともにトルコにおける日本研究は長足の進歩を遂げていることがわかる。研究内容も、単なる文化の紹介やトルコ国内啓蒙向けの内容から、より専門的で国際的レベルでの研究へと変貌した。特に若い世代の研究者たちは、日本一国の研究にとどまらず、よりグローバルな視点から研究を発展させている点に注目できる。

大学間の交換留学やトルコ経済の向上、航空運賃の値下げなどのおかげで、学生のレベルでも、日本に実際に行ってから興味を持つ者、日本へ留学する学

生の数も増え、間口は広がっている。近年では、若い世代の日本への興味は、インターネットゲーム、アニメや漫画などの影響が大きい。しかし、中国語や韓国語に押され、日本語講座が閉鎖された大学もある。また、現在の日本研究全体を俯瞰すると、歴史学も含めて、研究テーマが近・現代に偏重しており、一人を除いて、古代・中世の研究者がほとんどいない点は、これからの課題と言える。

日本とトルコは多くの点で類似しており、比較研究も盛んだが、近年のグローバル化の流れは、一国研究、一国対一国の比較研究に止まらない新たな視点を必要としているように思われる。今後の発展に期待したい。

(じらるでり あおき みゆき トルコ・イスタンブル工科大学 准教授補)